

〔文学と美術の出会い展によせて〕

土佐派による源氏物語色紙絵について

ー一大和文華館所蔵作品と奈良大学博物館所蔵作品を中心にー

紫式部によって十一世紀初頭に著された『源氏物語』は、物語が成立して間もなく絵画化されたと考えられます。十一世紀の作例は残されていませんが、十二世紀前半に制作されたと考えられる「源氏物語絵巻」(国宝、徳川美術館・五島美術館ほか蔵)を筆頭に、絵巻や冊子、扇面、色紙、屏風、掛幅、版本など、様々な形体の作品が数多く残されています。その中で本稿では、色紙に描かれた源氏絵に注目したいと思います。

源氏物語を描いた色紙絵は、縦横が二十センチほどで、屏風に貼り交ぜられたり、画帖に仕立てられたりするものが多いです。源氏物語色紙絵が文献上に登場するのは鎌倉時代です。『源氏秘義抄』(宮内庁書陵部蔵)に収められた「源氏絵陳情」という文献に、鎌倉幕府六代将軍となった宗室親王の御前に用いる屏風に貼り交ぜるための源氏物語色紙絵について記されています。現存する作品は室町時代以降のもので、最も古い作例の一つとして知られるのが、ハーバード大学美術館所蔵の土佐光信筆「源氏物語画帖」(H大学本と略記)です。室町時代後期の土佐派の宗家は、光信→光茂→光元と続きますが、光元が戦死したため、光茂の門人であった光吉が光元の遺児の教育を託され、土佐派の粉本を譲り受けたといえます。光吉(天文十一～慶長十八年/1539～1613)の代表作には、「源氏物語手鑑」(重文、和泉市久保惣記念美術館蔵、久保惣本と略記)、「源氏物語画帖」(重文、京都国立博物館蔵、京博本と略記)などがあり、

細密描写の源氏物語色紙絵を得意としていたことが分かります。光吉の子の光則も、「源氏物語画帖」(徳川美術館蔵、徳川本と略記)、「白描源氏物語画帖」(パークコレクション蔵)など、より小さな画面により細密に描く源氏物語色紙絵を残しています。光則の子の光起や、光起の子の光成の作品も伝わっており、粉本を受け継ぎつつ、土佐派の家芸の一つとして源氏物語色紙絵が描き継がれていることが窺えます。

大和文華館所蔵の「源氏物語画帖」(文華館本と略記)は、『源氏物語』五十四帖の中の「蓬生」「濡標」「若紫」「夕顔」「須磨」「明石」の場面を描いた六枚の色紙絵と六枚の詞書から成る画帖です。詞書は、肥瘦や奔放な動きのある鳥丸光広風の書体で、料紙には金銀泥で草花が装飾されています。絵は、現在は黒ずんでいるものの華やかな彩色と細やかな描線で表されており、土佐派の絵師によるものと考えられます。文華館本をH大学本(光信筆)、久保惣本(光吉筆)、京博本(光吉筆)、徳川本(光則筆)と比較すると、取りあがる場面に共通するものが最も多いのは久保惣本です。『源氏物語』の各帖には様々なエピソードがあるため、同じ帖を絵画化していても、描かれる場面が異なることがあります。文華館本の「濡標」「若紫」「夕顔」「須磨」は、久保惣本と同じ場面を絵画化しており、構図も類似するものが多いです。「夕顔」に関しては、京博本も同じ場面を取りあげており、より文華館本と構図が類似しています(図1～3)。六条御息所の邸に泊まった源氏が、見送りに出た

侍女、中将君に心惹かれ、和歌を贈る場面が描かれており、廊下の源氏と中将君、庭で朝顔を手折る女童、室内にいる六条御息所の姿勢や位置などがほぼ同じであるのが見てとれます。また、「須磨」の場面は、土佐光吉筆「源氏物語図屏風」(京都国立博物館蔵)に描かれるものと文華館本の構図がよく似ており、文華館本は光吉の図様を多く踏襲していることが分かります。下彫れの顔にやや大きめ鼻で鼻先に丸味のある顔貌表現も光吉作品に比較的類似しています(図4、5)。しかし、「夕顔図」において、光吉作品(図1・図2)では、御簾の間から秋草や朝顔の花が見え、景物を重ねた厚みのある描写がなされているのに対し、文華館本(図3)では、御簾越しに草花は見えず、やや平明な描写となっており、光吉作品よりもやや後れて制作されたと考えられます。

文華館本には落款・印象などはありませんが、箱表には「源氏絵土佐左近将監光吉筆 六葉」、箱裏には「住吉弘貫鑑定 山名貫義」とあります。箱書を記した山名貫義は土佐派から分派した住吉派の絵師で、幕末から明治にかけて活躍しました。鑑定したという住吉弘貫は貫義の師にあたります。箱書からは、文華館本が江戸時代後期に土佐光吉筆と考えられていたことが分かりますが、図様や描写からも、光吉周辺の絵師によって制作された可能性は高いと言えるでしょう。

展覧会では、奈良大学博物館から「源氏物語色紙絵」(奈良大本と略記)を拝借します。五十四帖のうち、「桐壺」「紅葉賀」「葵」「螢」「篝火」「若葉下」の場面を描いた六面の色紙絵です。奈良大本の「紅葉賀」(図6)を見ると、光吉作

品や文華館本と比べ、描写が大らかで、人物の周囲にゆったりとした空間があることが分かります。光吉・光則の図様とはあまり類似しませんが、室町時代末頃の制作で、土佐光元筆という伝承のある「源氏物語画帖」(京都国立博物館蔵、図7)の大らかな表現と通じるところがあり、古様な趣きがあるのが特徴です。光吉・光則の影響下より少し離れたところで活躍した土佐派系の画人によるものではないかと考えられます。

土佐派による源氏物語色紙絵は、室町時代後期から江戸時代前期にかけて多くの作例が残ることから、源氏絵の図様の展開を知る上で貴重です。色紙絵と同じく画面の小さな絵入版本への影響や、反対に大画面の屏風絵作品との影響関係などについても今後考察していきたいと思います。(宮崎もも)

※図1、4は『和泉市久保惣記念美術館 源氏物語手鑑研究』(和泉市久保惣記念美術館、1992年)、図2は『京都国立博物館所蔵源氏物語画帖』(勉誠社、1997年)、図7は『別冊太陽愛蔵版源氏物語』(平凡社、1976年)より複製致しました。



図6 奈良大本 紅葉賀図

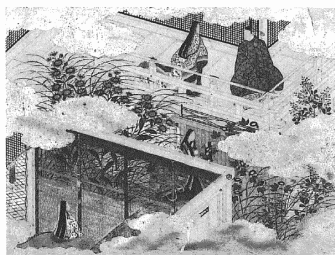
図7 伝土佐光元筆
源氏物語画帖 紅葉賀図
京都国立博物館蔵

図1 久保惣本 夕顔図

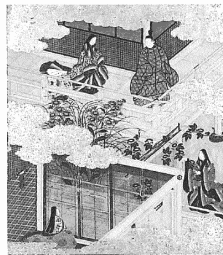


図2 京博本 夕顔図

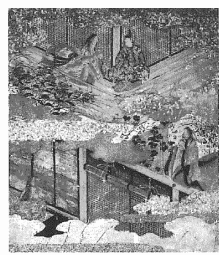


図3 文華館本 夕顔図



図4 久保惣本 蜻蛉図部分



図5 文華館本 夕顔図部分

季刊 美のたより No.184

平成25年10月13日

発行 大和文華館